

[論文]

ソネット「この身はあと千日の命」に於ける  
詩人 John Keats の一抹の哀感について

奥田喜八郎\*

On the Poet John Keats's Touch of Pathos in His Sonnet  
“This Mortal Body of a Thousand Days”

Kihachiro OKUDA

The purpose of this paper is to clarify the poet John Keats's touch of pathos in his sonnet entitled “This mortal body of a thousand days.” The first thing to explain is that a sonnet is a poem that has 14 lines. Each line has 10 syllables, and the poem has a fixed pattern of rhymes (abab/ /cdcd/ /efef/ /gg), which is called the “English Form” or “Shakespearean Sonnet.”

The second is to note that Robert Burns's cottage at Alloway, originally a clay hut, was rebuilt by Burns's father with his own hands. Later, until 1880, it was used as an ale-house. The third is to state that a museum, with an important collection of relics, including the Burns family Bible, adjoins the cottage.

The fourth is to mention that Keats went with Charles

---

\*おくだ・きはちろう：敬愛大学国際学部教授 英米文学概論・英語史・異文化コミュニケーション

Professor, Faculty of International Studies, Keiai University; English Literature History, English Language Origins, introduction to English and American literature, intercultural communication.

Brown to the cottage and took some whiskey (or toddy). Keats wrote a sonnet for the mere sake of writing some lines under the roof. They are so bad Keats cannot transcribe them. The Man at the cottage was a great Bore with his Anecdotes. The flat dog made him write a flat sonnet.

The fifth is to explain carefully that the sonnet was preserved in a transcript by Brown, who notes, “the cottage’s conversion into a whisky-shop, together with its drunken landlord, went far towards the annihilation of Keats’s poetic power.” The sixth is to emphasize that D.G. Rossetti told H. Buxton Forman that the sonnet, for all Keats says of it himself, is a good (or fine) thing. The seventh is to stress the thousand days’ symbols specified in the Old and New Testaments: “And shewing mercy unto thousands of them that love me, and keep my commandments” (Ex. 20:6).

In conclusion, Keats, with his touch of pathos, grieves over Burns’s premature death at the age of 37. Burns’s young death reminds Keats of one proverb: “Whom the Gods love die young.” We have another proverb, “The gifted die young.” Keats himself died on the night of 23th February 1821, aged 25 years and 10 months.

イギリスの後期ロマン主義を代表する詩人 John Keats (1795 – 1821) が、「この身はあと千日の命」 (“This mortal body of a thousand days”) と題して、切々と歌い上げたのが、次の 14 行詩である。

This mor/-tal bod/-y of a thou/-sand days  
Now fills, O Burns, a space in thine own room,  
Where thou didst dream a/-lone on bud/-ded bays,  
Hap/-py and thought/-less of thy day of doom!  
My pulse is warm with thine own bar/-ley-bree  
My head is light with pledg/-ing a great soul,  
My eyes are wan/-der/-ing and I can/-not see,  
Fan/-cy is dead and drunk/-en at its goal.

Yet can I stamp my foot up/-on thy floor,  
    Yet can I ope thy win/-dow-sash to find  
The mead/-ow thou hast tramp/-éd o'er and o'er,  
    Yet can I think of thee till thought is blind,  
Yet can I gulp a bump/-er to thy name—  
    Oh, smile a/-mong the shades, for this is fame! (音節は筆者のもの)

これは、Miriam Allottが編集した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1986) から引用したものである。

念のために、Ernest de Selincourtが編集した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1920) のそれと比べてみると、目立つ相違点は、(1) 詩題が、「バーンズの生家にての作詩」(“Written in the Cottage where Burns was born”)である。また、(2) De Selincourt版では、各行の頭が縦に揃っていることである。しかし、Allott版は、御覧のように、翼の形に配列された詩行である。この翼の形は、「暗黒と光明(啓蒙)」とか、あるいは「時間と永遠」を明示する、詩型であるという。

この他に、句読点などの相違がある。De Selincourt版では、5行目の行末を Barley-bree と大文字で歌う。また、7行目の中間の wandering, のように、コンマを用いる。8行目の行末は goal; のように、セミコロンを用い、更に、11行目の trampéd を、tramped と歌う。この11行目の行末 o'er, 一と、12行目の行末 blind, 一は、コンマの後に、ダッシュを用いる。13行目の行末は name, 一のように、ダッシュの前に、コンマを使う。そして、最終行の冒頭は、O smile と歌うのだ。

John Barnardが編集した『ジョン・キーツ全詩集』(*John Keats: The Complete Poems*, 1988) を繙いてみると、5行目の barley-bree は、Allott版のそれと同じ小文字である。7行目の wandering, と、コンマを用いるのは、De Selincourt版のそれと同じである。8行目の行末は goal: と、コロンを用いる。11行目の trampéd は Allott版のそれと同じである。そして、最終行の O smile は、De Selincourt版と同じである。詩題、詩行の配列は、Allott版

と同じである。

Houghton 卿が編集した『ジョン・キーツ全詩集』(*The Complete Poetical Works of John Keats*, 1912) のそれと比較検討してみると、Houghton 卿版では、5 行目は、old Barley-bree, と歌う。形容詞 own が old である。これは重要な相違である。面白い。8 行目の行末は goal; と、セミコロンをうい、De Selincourt 版のそれと同じである。11 行目の tramped、同行末の o'er, 一と、12 行目の行末の blind, 一も、De Selincourt 版のそれと同じである。最終行の O smile は、De Selincourt 版と Barnard 版のそれと同じである。詩題は De Selincourt 版のそれと同じであるが、しかし、詩行は Allott 版と Barnard 版のそれと同じ、翼の形に配列されている。このように、一篇の作品に対して、4 人が 4 人ともそれぞれ解釈を異にするというのは、興味深い。

松浦暢が編集注釈した『キーツのソネット集』(*Keats' Sonnets*, 1966) のそれを見ると、詩形は翼の形に配置されたものである。出口保夫が訳した『キーツ全詩集 3』(*The Complete Poetical Works of John Keats*, Vol. 3, 1980) のそれを見ると、各行の頭は揃っていて、「4 行、4 行、4 行、2 行」という詩形で訳している。このように、2 人の日本人の Keats 研究者も、使用したテキストによって、解釈が微妙に異なるのは、恐ろしい。

この sonnet の詩題も然りだ。重複するが、Allott 版を見ると、1 行目の、“This mortal body of a thousand days” である。Barnard 版は、Allott 版と同じである。しかし、面白いことに、De Selincourt 版では、“Written in the Cottage where Burns was born” である。Houghton 卿版を見ると、De Selincourt 版と同じであるが、すべて大文字で、“WRITTEN IN THE COTTAGE WHERE BURNS WAS BORN” である。

なにはともあれ、前者は「この身はあと千日の命」と歌う。それに対して、後者は「バーンズの生家にての作詩」と歌うのである。わが国の Keats 研究者の一人、松浦は後者の詩題であり、出口は前者の詩題で、出口訳を見ると「千日の生命の この肉体が」と読む。

筆者は上記で紹介した、Allott 版のそれを軸にして、精読したい。それを

味読する過程で、別の、De Selincourt 版や、Barnard 版、それに Houghton 脚版などを十分に参考にしたい、と思う。

Sonnet というのは基本的に、(1)14 行詩であること。また、(2)各行は「弱強調 5 歩格」であること。それに、(3)配置された「脚韻」であることが原則である。(3)の脚韻を見ると、それは「シェークスピア風ソネット」(Shakespearean Sonnet) であるのか、「ペトラルカ風ソネット」(Petrarchan Sonnet) であるのか、それとも「スペンサー風ソネット」(Spenserian Sonnet) であるのか、が分かる。

John Keats 作「この身はあと千日の命」は、ご覧の通り、(1)14 行詩である。(2)「弱強調 5 歩格」である。問題は 7 行目と、11 行目である。というのは、7 行目は、

My eyes are wan/-der/-ing and I can/-not see,

と歌い、御覧のように、11 音節であるからだ。1 音節多い。つまり、字余りである。しかし、これは、「鼻音・流動音 ([m], [n], [l], [r]) を含む音節では、前の音節が弱化して 1 音節のように律読される」という、つまり、「子音にはさまれる母音の縮読」(Syncope) の規定を踏まえて、wan/-der/-ing の 3 音節を、wan/-der'ng の 2 音節として縮読すると、全体の韻律は 10 音節となる。これは許容される範囲内の規定である。

また、11 行目は、De Selincourt 版のそれを見ると、

The mead/-ow thou hast tramped o'er and o'er,

と歌う。これは正しく、9 音節である。がしかし、Allott 版のそれを見ると、

The mead/-ow thou hast trampéd o'er and o'er,

と歌う。Allott は、動詞 tramp の過去形に詩的工夫を凝らして、tramp/-éd と歌うのである。ご存知のように、過去形は、tramped /træmpt/ であり、また過去分詞形も、tramped /træmpt/ であるからだ。重複するが、正しい発音は、/træmp/ /træmpt/ /træmpt/ であるからである。

つまり、tramped に対して、Allott は、視覚的にも少し詩的工夫を凝らして、tramp/-éd と、-ed の e に、é というアクセントを付けて、/træmpət/ と歌い、見た目に 2 音節の過去分詞形であるかのように数えさせている、

ということである。これで、問題の11行目の韻律は、10音節となるが、しかし、音読するときは、1音節/træmpt/として読む。これは決して正しい韻律ではないが、許される範囲内の韻律でもある。

次に、脚韻を見てみよう。詩人Keatsは、days, room, bays, doom, bree, soul, see, goal, floor, find, o'er, blind, name, fameと歌う。Days /déiz/と、bays /béiz/は正しく押韻する。Room /rú:m/と、doom /dú:m/も正確に押韻する。この「最初の4行連句」は、/abab/と整然と韻を踏む。

そして、bree /brí:/と、see /sí:/は正しく押韻し、soul /sóul/と、goal /góul/も正確に押韻する。この「2番目の4行連句」もまた、/cdcd/と整然と韻を踏む。更に、floor /flo:/と、o'er /óuə/の押韻は問題であるが、しかし、find /fáind/と、bind /báind/は正しく押韻する。この「3番目の4行連句」は、/efef/と整然と韻を踏むはずであるのだが、残念なことに、前者の押韻、floorと、o'erは、問題である。最後に、name /néim/と、fame /féim/は正確に押韻する。この最後の「2行連句」は、/gg/と整然と韻を踏む。

問題の押韻、floor, o'er [over] であるが、例えば、express /iksprés/と、displace /displéis/が許されるのは、rhymeは、同一の音のほかに、「類似の音」をも許すからである。これは不完全韻 (imperfect rhyme) と呼ばれる規定であるという。苦しい言い訳であるが、これも、「類似の音」の一例である、と筆者は読みたい。

よって、詩人Keatsは、この14行詩を、/abab/ /cdcd/ /efef/ /gg/という脚韻を用いて、先輩詩人Robert Burnsの短命を切々と歌い上げるのである。これは、御覧のように、「3 quatrains」と、「1 couplet」の型式である。これを「イギリス風ソネット」(the English Form) という。別に、Shakespearean Sonnetともいう。

「この身はあと千日の命」と題する、この作品は、Allott説によると、

Written 11 July 1818 in Burns's cottage at Ayr.

という。つまり、スコットランドの、当時Ayrshire州の首都「Ayr /éar/」のBurnsの生家にて、1818年7月11日の作詩」であるという。しかし、注意

すべきことは、1975年以降、Ayrshire州はStrathclyde州に合併統合された、ということである。

Allott説によると、先輩詩人Robert Burnsの生地は、首都Ayrであるという。Ayrは、重複するが、スコットランドの旧州Ayrshire（現Strathclyde州）南西部の港市である。

旧州Ayrshireというのは、その地に流れるAyr川に因んだ州名である。Ayrはゲール語の *ar*、または *ad'har* といい、字義は *clear, rapid, shelving* であるという。つまり「Ayr川は、水が透き通っていて、流れが速く、緩やかな勾配の川」であるという。Blue Guideによると、

Ayr is a large, busy town, with its extensive sands and many amenities the principal resort along this coast. The amenities include two golf courses, town-owned river fishing, one of Scotland's leading racecourses and swimming baths with three heated pools.

と説明する。「Ayrは、人や車で賑わう大港町」であり、「砂浜が広がり、娯楽設備も整備されている」という。「Ayrは、その海岸地帯に沿って、スコットランドを代表する保養地」である。「娯楽設備として、ゴルフ場もあれば、川魚釣り場もあり、競馬場もあり、温泉プールもある」という観光地Ayrである。この地に、スコットランドを代表する国民詩人Robert Burnsが誕生したという。そして、Blue Guideは、

Extolled by Burns as a town unsurpassed 'for honest men and bonnie lasses', Ayr remembers the poet with a statue (Lawson 1891) outside the railway station. There is also the little *Tam o' Shanter Inn* in High St, possibly the starting point of the ride so graphically described. The inn, interesting as typical of those of Burns' time, is now a museum.

と紹介する。「詩人Burnsは、この地の住民の一人として、住民Aye人を優る者はいないと激賞する」という。「人は正直者で、娘は快活」であるという。また「昔も今も、Ayr住民は、詩人Burnsのことをよく覚えている」といい、「Ayr駅の構外に、Burnsの彫像がある」と親しげに語る。また「High通りには、こじんまりとした旅館があって、それは、詩題“Tam

o' Shanter Inn”という一篇の詩の示す通り、正に誠実にして、魅力溢れる、スコットランド人らしい気骨の旅館その物である」と誇る。旅館に入ると、「当時の詩人 Burns の生い立ちがよくわかる」といい、「その旅館は、現在、国民詩人 Robert Burns の資料館である」という。

ここにいう、“Tam o' Shanter /tæməʃæntə/”とは、Burns の代表傑作詩である。これは 1790 年の作詩である。農民の Tam (Tom, Thomas) は泥酔して、Ayr 町からの帰途、馬に跨り、深夜に Alloway の教会の傍らを通り過ぎようとしたとき、教会の中から歌声が聞こえてくる。中を覗くと、魔法使いや魔女たちが Old Nick の奏でる風笛の音に合わせて踊っているではないか。それを眺めて、Tom は思わず声を上げたので、魔女に気づかれる。Tom はそれに気づき、逃げる。一人の魔女が追いかけてくる。Tom は必死に逃げる。魔女が追う。追われた Tom が、Doon 河にかかる橋の中央まで逃げてきて、辛うじてその難を免れたという内容である。がしかし、Tom が乗っていた馬の尾だけが捕らえられて、切り取られていることに気づく、という摩訶不思議な一篇である。

The Doon /dú:n/ という川は、スコットランド南西部、Strathclyde /stræθkláid/ 州の川である。北西に流れ Firth of Clyde に注ぐ、48km の川である。doon という語は、古英語の *dun* からの派生語で、down (hill) という原義を有するという。

ここにいう、the Old Nick とは、「悪魔」(the devil, Satan) を意味する古語である。Nick は、Nicholas の別称である。これはドイツ語の *Nichel* から発達した語で、goblin という原義を有するという。これは、「醜い姿で人間を苦しめると考えられている、鬼」という意味の名詞 goblin であるが、しかし、よく調べてみると、その昔、goblin は、元、中高地ドイツ語の *kobold* (*kobel*) といい、「小屋 + -d (指小辞)」即ち「家庭の神」という意味であったという。

想起するのは、アメリカの作家 Robert Montgomery Birds (1805 - 54) の小説 *Nick of the Woods* (『森の悪魔』、1837) である。これは、アメリカ先住民 (Indians) に、家族が皆殺しにされた開拓線の Quaker 教徒の一農民が、無



抵抗主義を装いながら執拗に復讐を遂げる、という物語である。この作品について、斎藤光は、「J. F. Cooper (1789 - 1851) が描いた ‘noble savage’ と違って American Indian を余りに感傷的に描いたのに反対して書かれた小説」であるという。これによると、彼らは狡猾で残忍で憎むべき野蛮人だとされている問題小説である。アメリカの古語として、full of Old Nick (= full of the Devil) という用語がある。

それはそれとして、再び、Blue Guideを見ると、

*Alloway Kirk*, a ruin even before Burns' time, is a short distance s. It was through the E. window that Burns' perhaps best-known character, Tam o' Shanter, watched a witches' orgy.

と案内する。「Alloway Kirk (= church) は、Burns 時代より以前に、すでに廃墟となった教会」で、「教会は、Burns の生家から南方に少し下った位置にある」という。「その教会の東側の窓を通して中をみると、Burns の作品の、最もよく知られている主人公、Tam o' Shanter が魔女たちの飲めや歌えの大騒ぎを眺めていた」という。この主人公 Tam o' Shanter について、John Drinkwater (1882 - 1937) が編集した『文学概説』第2巻 (*The Outline of Literature*, vol. 2) の中で、

The original of Tam o' Shanter was Douglas Graham, a farmer at Shanter, in Carrick.

と論及する。架空の主人公ではなく、実在者をモデルにして歌い上げた Tam o' Shanter であるというのは、興味深い。

なにはともあれ、Allott が指摘するように、Burns の生家は首都 Ayr の中にある、と読める。しかし、北村常夫はより正確に、「Robert Burns は、一百姓の子として Ayrshire の Alloway という寒村に生まれた」と言及する。寒村 Alloway /æləwəi/ は、スコットランド南西部、Ayr 付近の村落である。ここが、詩人 Burns の出生地である。それ故に、筆者は、

Written 11 July 1818 in Burns Cottage at Alloway

と正確に徹したい。Blue Guideによると、

Alloway, virtually a southern suburb of Ayr, is the village where Burns was

born in 1759 and lived his first seven years. *Burns Cottage*, originally a clay hut, was rebuilt by Burns' father with his own hands.

と紹介する。「Alloway は、地理的に見て、Ayr の南方に位置し、Ayr 郊外の一地区にあたる」という。「Ayr 郊外の一地区 Alloway」であるから、Allott 説の「in Burns cottage at Ayr」という説明はいかがなものか。勿論、寒村 Alloway が、大都市 Ayr の中に位置しておれば、問題ではない。しかし、Drinkwater が、上記の『文学概説』の中で、

The cottage is situated in the valley of Alloway, near the town of Ayr.

と説明するからである。無論、Barnard 説の「in Robert Burns's Ayrshire cottage」という説明であれば、旧州 Ayrshire でも間違いではない。

詩人 Burns は寒村 Alloway で生まれた。そこに、Burns は 7 年間住んだ。「バーンズの生家は、もとは、粘土の粗末な小屋であったが、父 William Burns が手作りで、それを立て替えた」という。Drinkwater によると、

There is, in the tiny village of Alloway, about two miles from the town of Ayr, a two-roomed cottage, in which, on the 25th of January, 1759, Robert Burns was born.

とより詳しく紹介する。Drinkwater は、その Burns の生家を、“clay biggin” という。スコットランド語の biggin は、名詞で、a building; a house; a cottage という意味である。Clay について、想起するのは、旧約聖書の「ヨブ記」の、

Behold, I am according to thy wish in God's stead: I also am formed out of the clay.

という第三十三章第六節の神の言葉である。これは、特に人間の肉体が造られたと考えられた、「土」の意味をもつ詩語である。この名詞 clay に託して、「人間の肉体」に重ねて、「人間の住む小屋」をイメージしているのも、意義深い限りである。Drinkwater は、Burns の生家を、a clay biggin であるという。しかし、Blue Guide では、a clay hut であるという。

更に、Blue Guide は、

Later, until 1880, it was used as an ale-house. A museum, with an impor-

tant collection of relics, including the Burns family bible, adjoins the cottage.

と案内する。時が経って、「バーンズの生家」は、1880年まで、「ビアホール」として使用されたという。現在は「バーンズの資料館」として、そこに Burns 一家の聖書や、詩人 Burns の重要な遺品などが保管されているという。この資料館は、バーンズの生家を更に増築して、隣接したものであるという。

首都 Ayr は、昔も今も、港市であり、観光地として有名である。Barnard 説を見ると、重複するが、Allott 説と同じように、

Written 11 July 1818 in Robert Burns's Ayrshire cottage.

という。「Robert Burns の Ayrshire 州の生家にての作詩」と説明する。筆者の使用する、Barnard 版は、1988年に出版された3版ものである。初版は1973年で、再版は1977年であることを思うに、Barnard 説の「Ayrshire 州の生家」というのは、調査不足である。正確に紹介するなら「旧州 Ayrshire の生家」(the old Ayrshire cottage)であろう。また、現在の「Strathclyde 州の生家」と紹介すべきだろう。是非、区画整理の説明が欲しい。

Allott は、更に、

See under this date in K.'s 11-13 July 1818 journal-letter to Reynolds: 'I am approaching Burns's Cottage very fast . . .'; and under 13 July: 'We went to the Cottage and took some Whiskey—I wrote a sonnet for the mere sake of writing some lines under the roof—they are so bad I cannot transcribe them—the Man at the Cottage was a great Bore with his Anecdotes . . . O the flummery of a birth place! Cant! Cant! Cant! . . . The flat dog made me write a flat sonnet' (Li 322, 324).

と指摘する。ここにいう Reynolds というのは、John Hamilton Reynolds (1794 - 1852) といい、詩人 Keats の友人である。Reynolds はイギリスの詩人で、London の St. Paul 校に学んだ。1814年に、2巻の詩集を出版。1816年以來、Keats と文通した。Reynolds は、弁護士事務所の書記や、裁判所

の書記をしながら、絶えず詩文を書いたという。当時の詩人 Lord Byron (1788 - 1824) や、Sir Walter Scott (1771 - 1832) や、それに Percy Bysshe Shelley (1792 - 1822)、そして John Keats 等の影響を色濃く受けた、と思われる “The Naiad” (1816) や、“The Fancy” (1820)、それに “The Garden of Youth” (1821) 及び数篇のソネットの作者として知られている。

念のために、Barnard 説を見ると、

Keats told Reynolds, ‘We went to the Cottage and took some Whiskey—I wrote a sonnet for the mere sake of writing some lines under the roof—they are so bad I cannot transcribe them—The Man at the Cottage was a great Bore with his Anecdotes . . . O the Flummery of a bird place! Cant! Cant! Cant!’ (L I, p. 324).

と言及する。これらは、友人 Reynolds に宛てた 2 通の書簡の一部である。「思ったより早く、バーンズの生家に近づきつつある」という、その 1 通目は、1818 年 7 月 11 - 13 日の日付の書簡であるという。そして、両者が共に紹介する、「2 人はバーンズの生家に出かけた。そこでウイスキーを少し頂いた」という、その 2 通目は、1818 年 7 月 13 日の日付の書簡であるという。

Whiskey とは、大麦、ライ麦、トウモロコシなどに、麦芽を加えて発酵させて蒸留した酒であるが、通例、アルコール度は 43 - 50 % である。Whiskey はアメリカ、アイルランド、スコットランドでの綴りである。これ以外では、即ち、イギリスや、カナダでは、whisky と綴る。ただし、アメリカ産のスコッチは、本場の綴りをなぞって、whisky という。

Whiskey は、*whiskybae* の短縮形であり、アイルランド語の *uisce beatha*、またはスコットランドのゲール語の *uisge beatha* からの由来語であるという。「命の水」(water of life) という原義を有するという。詩人 Keats は、この「命の水」を少し頂いた、という。

そして、Allott 説によると、「詩人 Keats は、この Burns の生家の “屋根の下で” 数行の詩を書き留めるつもりが、一篇の sonnet を書き上げた」という。しかし、「その 14 行詩はあまりに酷い出来具合で書き写すことが出来

ない」という。つまり、友人 Reynolds 宛の書簡に、それを書き写すことが出来ない、というのだろう。So bad の形容詞 so に託して、詩人 Keats は「拙いな」という気持ちや、感情を込めているのも、意味深い。それは、詩人 Keats 「自身の判断」(very bad) を述べている、のではないからである。この形容詞 so と、very の語感の相違に注意しよう。

面白いのは、詩人 Keats は、敢えて、under the roof (「屋根の下で」と綴っていることである。想起するのは、William Shakespeare (1564 - 1616) 作『ハムレット』第二幕第二場の中の、いらいら病を患うハムレット王子が呟く、

Look you, this brave o'erhanging firmament,

This majestic roof fretted with golden fire,

という台詞である。「この立派な青空も、ほら、御覧、この黄金色の火をちりばめた壮大な天井も」という台詞を思い出し、詩人 Keats も、この粗末な Burns の生家の「屋根」に託して、The roof of heaven (「天空」) のイメージをダブらせながら、ひと時、詩作に耽るからである。詩人 Keats は、「屋根の下で」に託して、先輩詩人 Burns の生家を訪ねたその時、その場の荘厳な感動を友人 Reynolds に伝えているのも、見事である。

然し、Allott 説によると、「ピアホール」に模様替えした、Burns の生家に辿り着いた詩人 Keats は、まるっきり様子の変わった Burns の生家を目の当たりにして、落胆したという。殊の外、「ピアホール (生家) の亭主 (the Man at the Cottage) が面白く語る、Burns に関わる秘話 (his Anecdotes) にうんざりだ」と悲鳴を上げる始末である。「まったく退屈な男だ」(a great Bore) と詩人 Keats は吐き捨てるように告白するのも、気の毒である。

更に、詩人 Keats は、尊敬する先輩詩人 Burns の、この生誕の地 (a birth place) で、「どこまでも面白がって図に乗る、この亭主のたわごと」(O the flummery) に驚きと、失望の余り、思い余って、「偽善者のたわごとだ！」(Cant!) と親友 Reynolds に吐露しているのも、哀れである。それも、Cant! Cant! と3度も繰り返されるのである。数字の3は、「聖なる数字」(threefold divinities) をイメージすることを思うに、絶対性を明示するのだ

ろう。

Allott は更に、重複するが、

The flat dog made me write a flat sonnet.

と詩人 Keats が郵送した、友人 Reynolds 宛の手紙の一部を引用する。「それは、味も素っ気もない sonnet だ」という。「それはまるで、ピアホールの床に、だらんと寝そべっている犬のようだ」ともいう。面白い表現である。

松浦は、この “a flat sonnet” 観に関して、

いささか自己弁解的であるが、キーツの自称 “flat sonnet” の説明としては、まことに面白い。もっとも、キーツ自身が、このソネットを嫌い “bad sonnet” とみなしていたが、D. G. Rossetti は、“for all Keats says about it himself, is a fine thing.” と H. B. Formna への手紙で称揚している。(Finney, p. 418 所収)

と論破するのだが、しかし、残念なことに、松浦のいう、3行目の、H. B. Formna の名前 Formna は、Forman の誤植だろう。Harry Buxton Forman (1842 - 1917) とは、イギリスの文学者である。Shelley の *Poetical Works* (1876) と、*Prose Works* (1880)、及び *Letters of John Keats to Fanny Brawne* (1878) と、*Poetical Works and Other Writings of John Keats* (1883) の編纂が、Forman の主要な功績である。

また、ここにいう、D. G. Rossetti (1828 - 82) とは、北村常夫によると、イギリスの画家であり、詩人である。London 大学 King's College に学ぶ。まもなく John Sell Cotman について絵を習い、1842 年以来美術に身を委ねたという。1846 年 Royal Academy に入って研究し、また 1848 年 Ford Madox Brown に師事した。画家 Holman Hunt 及び John Everett Millais、それに彫刻家 Thomas Woolner その他の人々と共に「ラファエロ前派」(the Pre-Raphaelite Brotherhood) を創始し、“Girlhood of Mary Virgin” (1849) を展覧したという。Rossetti は長年画家としてのみ知られていたが、1847 年頃から詩を書き始めていたという。Rossetti の特徴は、「形体美に対する熱愛、道徳観からの離脱、濃艶な色彩と強烈な芳香とに対する趣味、そして

それらを表現する絢爛な言葉」であるという。

筆者は、詩人 Keats の傑作「この身はあと千日の命」を味読して、詩人 Keats の「一抹の哀感」をもって、この Rossetti の卓見、“for all Keats says about it himself, is a fine thing.” に同感する者である。Allott もまた、この Rossetti の称賛を、

D. G. Rossetti told H. Buxton Forman that the sonnet, ‘. . . for all Keats says of it himself is a good thing’ (letter of 13 June 1881, *John Keats, Criticism and Comment*, 1919, p. 20).

と紹介する。Allott は、(1) a good thing であると引用する。しかし、松浦は、(2) a fine thing であると紹介する。前者のいう、形容詞 good の本義は、「よい」である。期待通りの好ましい特性を備えているという意味の good である。後に来る名詞の内容に応じて訳し分ける必要があるのだが、しかし、筆者はこれを「申し分のない作品」と読む。Cobuild 版を見ると、Good means of a high quality, standard, or level. と説明する。形容詞 high に注目しよう。High の本義は、「高く大きい」である。

それに対して、後者のいう、形容詞 fine の本義は、「仕上がった」である。すぐれたことを表す一般的な語 fine であるが、筆者はこれを「完璧な作品」と読む。Fine は、元、古フランス語の *fin* からの借用である。これは、「完成した」という原義を有するという。佐久間治説によると、これは、「見かけの美しさ」ではなく、「完成度の高さ」を表現する語であるという。Fin は、現代英語の finished に対応する語で、「仕上がった→洗練された」から「立派な」や「美しい」へと発展したという。Cobuild 版によると、You use fine to describe something that you admire and think is very good. と説明する。「ものすごく（非常に）よい」という副詞 very に託して、Rossetti は、「自分の判断」をはっきりと述べているもの、と思われる。

Allott は更に、

K. also refused to send a copy to Tom Keats (L i 332), but the poem was preserved in a transcript by Brown, who notes, ‘[the cottage’s] conversion into a whiskey-shop, together with its drunken landlord, went far

towards the annihilation of . . . [K.'s] poetic power' (KC ii 62).

と論及する。「詩人 Keats は弟 Tom Keats 宛の手紙にも、この sonnet のコピーを送ることをはっきりと断った」という。「しかし、Brown はそれを書き写しておいて、その書写が保存されている」という。ここにいう、Brown というのは、本名 Charles Armitage Brown (1786 - 1842) といい、イギリス人で、John Keats とかつて同居していたことのある、親友兼兄貴分に当たる人物である。文人 Brown は、*Narensky* (1814) というオペラを書き、また Shakespeare の *Sonnets* に関する著書がある。文人 Brown は、この「スコットランド徒歩旅行」の詩人 Keats のお供をした、友人である。Fred Inglis は、著書『キーツ』(*Keats*, 1966) の中で、

Brown was eight years older than Keats.

と紹介する。「Brown は、Keats より 8 歳年上である」という。Allott 説によると、この作品について、友人 Brown が、次のような注解を添えているという。曰く「生家が、ウイスキー店に模様替えし、酔っ払いの亭主と一緒にであった」という。そして、「生家は、遠い道のりを経て、いつか全滅壊滅の憂き目にあうだろう」という。

文人 Brown は、先輩詩人 Robert Burns の生家を、後に、「a whiskey-shop に模様替えした」という。しかし、Blue Guide では、「an ale-house」であるという。Ale とは、Cobuild 版によると、Ale is a kind of strong beer. と説明する。エールは、ビール的一种で、約 6% のアルコール分を含む。アメリカでは、普通のビールよりもやや強くて苦いのをさすが、イギリスでは、beer と同じであるという。Ale は、beer より上品な言葉である。想起するのは、Good ale will make a cat speak. (「上等のエールには猫さえ口をほぐす」という諺である。面白い。

「この生家が、いつか全滅の憂き目にあう予感を得て、詩人 Keats はその時、その場所で、靈感を受けて歌い上げたのが、この一篇“この身はあと千日の命”である」と、友人 Brown が書き残したという。これは、なんとという哀れ深い予感であろうか。

Allott はこの白眉「この身はあと千日の命」という sonnet の前書きの最



後に、

Text from 1848 as following Brown's transcript.

と指摘する。「1848年に出版された詩集」から引用したもので、これは、あの時の「Brownが書写した14行詩」であるという。命拾いをした作品である。

それでは、純粹なる美の詩人 Rossetti が称賛する、この傑作「この身はあと千日の命」(“This mortal body of a thousand days”) を精読味読することにしよう。詩人 Keats は、重複するが、

This mortal body of a thousand days  
Now fills, O Burns, a space in thine own room,  
Where thou didst dream alone on budded bays,  
Happy and thoughtless of thy day of doom!

と歌うのだ。形容詞 mortal は、Cobuild 版によると、If you refer to the fact that people are mortal, you mean that they have to die and cannot live for ever. と説明する。「人間は死すべきもの。」(Man is mortal.) である。Mortal は、元、ラテン語の *mortalis* から派生した語である。これが、*mort*, *mors* から発達した語であるという。「死」という原義を有する。「死をまぬがれない」が本義である。詩人 Keats は、恐らくは、

この身はあと千日の命である

と歌うのだろう。1年は、365日であるから、「あと2年と7ヵ月余り」の命であると歌うのか。当時、詩人 Keats (1795 - 1821) は、23歳であることを思うに、また、26歳で亡くなっていること等を思い合わせると、Keats の予告が的中することになる。これはなんという運命なのか。

想起するのは、旧約聖書の「出エジプト記」(“Exodus”) の中の

And 'shewing mercy unto thousands of them that love me, and keep my commandments.

という第二十章第六節の神の言葉である。「わたしを愛し、わたしの戒め

を守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。」という。第五節を見ると、

Thou shalt not bow down thyself to them, nor serve them: for I the LORD thy God am a jealous God, visiting the iniquity of the fathers upon the children unto the third and fourth generation of them that hate me; これは、「それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし」と明記する神の言葉である。後半の「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、」という神の言葉が重要である。そして、第六節の中の「千代に至るだろう」という「千」という数字は、神の恵みを受ける、有難い数字であるのも、重要である。これは、また「申命記」(“Deuteronomy”)第五章第十節にも明記されている。

そして、「サムエル記上」(“I Samuel”)の中に

And the women answered one another as they played, and said, Saul hath slain his thousands, and David his ten thousands.

And Saul was very wroth, and the saying displeased him; and he said, They have ascribed unto David ten thousands, and to me they have ascribed but thousands: and what can he have more but the kingdom?

という第十八章第七節と第八節の神の言葉がある。「サウルは千を～」 「ダビデは万を～」と、女たちが踊りながら互いに歌いかわす、のを聞いたサウル王は怒る。第十二節に、「主が、気を悪くしたサウル王を離れる。主はダビデと共におられたので、サウルはダビデを恐れた。」(And Saul was afraid of David, because the Lord was with him and was departed from Saul.) という。「万も千も共に、神の恵みの数字」であるのに、サウル王が嫉んだが故に、主がサウル王を離れるという。

「ダビデ」(David)とは、ご存知のベツレヘムのJesseの末っ子で、ペリシテ人(Philistines)の巨人Goliathを殺したという。そしてDavidは、Saul

王のあとを継ぎ国都を Jerusalem に定め、約 40 年間イスラエルの王となる。これは、紀元前 1000 年ごろのことである。また David は、旧約聖書の「詩篇」(“Psalms”) の作者だと伝えられる。David という語は、元、ヘブライ語の dāwīd といい、beloved, friend という原義を有するという。

また「サウル」(Saul) とは、イスラエルの第一代の王である。Saul という語は、元、ヘブライ語の Šául といい、asked for という原義を有するという。

更に、「イザヤ書」(“Isaiah”) の中に、

A little one shall become a thousand, and a small one a strong nation: I  
the Lord will hasten it in time.

という第六十章第二十二節の神の言葉がある。「その最も小さい者は氏族となり、その最も弱い者は強い国となる。」「a thousand を氏族」というのは、面白い。この、a thousand は、神の恵みを受けた氏族を明示するもの、意味深い。

「ダニエル書」(“Daniel”) の中に、

A fiery stream issued and came forth from before him: thousand thousands ministered unto him, and ten thousand times ten thousand stood  
before him: the judgment was set, and the books were open.

という第七章第十節の神の言葉がある。「彼に仕える者は千千、彼の前にはべる者は万万」という。

新約聖書の「ヨハネの黙示録」(“Revelation”) の中にも、

And I beheld, and I heard the voice of many angels round about the  
throne and the beasts and the elders: and the number of them was ten  
thousand times ten thousand, and thousands of thousands;

という第五章第十一節の神の言葉がある。「御座と生き物と長老たちのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、大声で叫んでいた」という。このように「主に仕える者は、その数千千、万万にして」という無限に広がることを明示する。

わが国でも、(1)「千日参り」とか、あるいは (2)「千日詣で」、(3)「千日

修行」に、(4)「千日講」という言葉がある。(1)と、(2)は、千日の間、神社仏閣に参詣することをいう。江戸時代には、特定の日、即ち7月9日・10日に、江戸では浅草寺、京都では清水寺、大阪では四天王寺に参詣すると、千日分のご利益があるとされるという。(3)の「千日修行」とは、比叡山での荒行事をいう。(4)の「千日講」とは、千日間、法華経を読誦し、講説する法会のことである。また、千日の間、寺社に参籠することを、(5)「千日籠り」という。

「千も万もいらぬ」とは、「かれこれ言うには及ばない」という意味である。例えば、「千も万もいらぬ、これへ短冊を持参すれば済むこと」というふうな、使用する。「千客万来」、「千載一遇」、「一騎当千」等などもある。

忘れがたいのは、旧約聖書の「詩篇」(“Psalms”)の中の

For a day in thy courts is better than a thousand. I had rather be a door-keeper in the house of my God, than to dwell in the tents of wickedness.

という第八十四篇第十節の神の言葉である。「あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさるのである。わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろ、わが神の家の門守となることを願う」という言葉である。上記の「千」や「万」に纏わる新旧の聖書の神の言葉、即ち「神の恵み」を踏まえてみると、思うに詩人 Keats は、「主の大庭にいる一日」(a day in thy courts) という言葉に託して、「先輩詩人 Burns の生家にいる一日」(a day in Burns's Cottage) を声高らかに歌うのではあるまいか。

松浦は、この最初の行、即ち、This mortal body of a thousand days を、「千日の命のこの生身の人間」と読み、これは、「キーツ自身のこと」という注釈を添える。出口保夫訳を見ると、「千日の生命の この肉体が」と読む。出口は、この「生命」に「いのち」というルビを添える。『岩波国語辞典』によると、「命」というのは、「生物の生きる力・期間」を意味し、「生命」とは、「生きて活動する根源の力で、生物を生物として存在させるもの」を意味するという。

詩人 Keats は、それに続けて、厳肅に、

Now fills, O Burns, a space in thine own room,

と歌う。ここにいう fills は、他動詞である。動詞 fills の語尾の-s は、「3 単現の-s」であるから、主語が3人称であり、かつ単数であり、かつ現在形で用いる場合の動詞の語尾の-s である。そうすると、主語というのは、1 行目の This mortal body (of a thousand days) を指すのだろう。即ち、「この身はあと千日の命」即ち「あと千日の命であるこの身」が、動詞 fills の主語となるのだろう。

そして、詩人 Keats は声高らかに、fills a space in thine own room, と定めるのだ。これは「貴方御自身の部屋の中に1つの空間を占める」と歌うのではあるまいか。ここにいう own というのは、このように所有格 thine の後に使われると、「比較意識」を明示することに、注意しよう。これは「他ならぬ、貴方御自身の」と歌うのだろう。また、a space というのは、思うに、「創世記」(“Genesis”) の中の

And he delivered them into the hand of his servants, every drove by themselves; and said unto his servants, Pass over before me, and put a space betwixt drove and drove.

という第三十二章第十六節の神の言葉を下敷きにして、詩人 Keats がここに「1つの空白」を明示するのではあるまいか。「彼はこれらをそれぞれの群れに分けて、しもべたちの手にわたし、しもべたちに言った、“あなたがたはわたしの先に進みなさい、そして群れと群れとの間には隔たりをおきなさい”」という前半の「それぞれ」というのは、「雌やぎ二百、雄やぎ二十、雌羊二百、雄羊二十、乳らくだ三十とその子、雌牛四十、雄牛十、雌ろば二十、雄ろば十」をいう。この神の言葉「隔たり」(a space) に託して、詩人 Keats がここに「1つの空間」(a space) をイメージするのは、意味深い限りである。即ち、「先輩詩人 Burns と、後輩詩人 Keats との間には隔たりをおく」という a space であろう。

しかも、それは「他ならぬ、バーンズ御自身の部屋の中での1つの空間、即ち隔たり」である、と歌うのは、味わい深い。というのは、詩人 Keats が歌う「部屋」(room) は、「イザヤ書」(“Isaiah”) の中の、

Come, my people, enter thou into thy chambers, and shut thy doors about thee: hide thyself as it were for a little moment, until the indignation be overpast.

という第二十六章第二十節の神の言葉の「へや」(chamber)をイメージするからである。「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ」という「へや」(chamber)は、無論、「マタイによる福音書」の中の

But thou, when thou prayest, enter into thy closet, and when thou hast shut thy door, pray to thy Father which is in secret; and thy Father which seeth in secret shall reward thee openly.

という第六章第六節の神の言葉の「へや」(thy closet)を明示するからである。「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」という「へや」は、このように、「祈りの場所」であり、「あなたの父がおいでになる場所」であるからである。

思うに、詩人Keatsは、厳格に、

あと千日の命であるこの身は、おおバーズよ、

いま、他ならぬ貴方御自身の部屋の中に居ます、

と歌うのではあるまいか。出口訳を見ると、「千日の生命の この肉体が、おお バーズよ、／ あなたの部屋にいま小さい空間を占めている」と読む。気になる事は、(1)「おお バーズよ、」という1字空けである。その理由は、感嘆詞Oは、常に大文字で書き、かつコンマを伴わなくて、かつ直接呼びかける名の前に付けるからである。例えば、O Lord, help us! (「おお神よ、助けたまえ!」)という風に、である。思うに、このO Lordに重ねて、詩人Keatsは厳格にO Burns (「おおバーズよ」と歌うのではないか。

また出口は、(2)「小さい空間」という「小さい」という形容詞を添えていることである。これは、「占める場所が少ない」という意味であろうが、

しかし詩人 Keats が歌うのは、既に上記に指摘しておいた、「あなたの大庭にいる一日は、よそにいる千日にもまさる」という、あの「詩篇」の神の言葉の明示する「恩恵」に感謝する念を歌い上げる、という詩興ではあるまいか。これが筆者の解釈である。更に、「創世記」の神の言葉が明示するように、「部屋」の中の、どこでも良い訳ではない。そこには自ずと、「Burns と Keats との一定の隔たり」が重要であることを歌い上げる、詩境であるというのが筆者の解釈である。しかも、「他ならぬ、Burns ご自身の部屋」その物は即ち、「イザヤ書」や、「マタイによる福音書」の神の言葉が明示する「祈りの場所」を歌い上げるという作風であると思われるからである。これが筆者の解釈である。

詩人 Keats は、更に、

Where thou didst dream alone on budded bays,

Happy and thoughtless of thy day of doom!

と規定する。松浦は、この2行に関して、「バーンズの“day of doom”について、効果的な解説は次の文であろう。」といい、詩人 Keats が友人 J. H. Reynolds に宛てた書簡の一部を紹介するのである。曰く、

His misery is a dead weight upon the nimbleness of one's quill—I tried to forget it—to drink Toddy without any care—to write a merry Sonnet—it won't do—he talked with Bitches—he drank with blackguards, he was miserable—We can see horribly clear in the works of such a Man his whole life, as if we were God's spies. (To J. H. Reynolds, 11 - 13 July 1818)

であるという。ここにいう、he は、勿論、先輩詩人 Robert Burns を指すのだろう。「Burns のみじめさは、或る死体のような重みが一気呵成にペンを走らせる作品の上に乗っかっていることである」という。これは、後輩詩人 Keats の詩人 Burns 観である。面白い。そして、「僕 (= Keats) はそのことを忘れようとしていた」といい、「何の注意も抱かないで、Toddy を飲み、一篇の陽気な Sonnet を書こうとした」という。

ここにいう、Toddy とは、(1)「トディ」といい、これは「ウイスキー・

ラム・ブランデーなどに湯と砂糖とレモンなど香料を加えた飲み物」である。また、(2)「ヤシ酒」ともいい、これは「toddy palmの樹液を発酵させた飲み物」である。Toddy palmは、植物の「クジャクヤシ (*Caryotaurens*)」で、その汁を発酵させてヤシ酒を造るインド産のヤシをいう。念のために、toddyという語は、ヒンディー語の *tari* からの借入語で、juice of the palmyra tree という原義を有するという。Palmyraとは、植物の、「パルミラヤシ、オオギヤシ (*Borassus flabellifer*)」のことである。これは、熱帯アジア産の扇状葉をつけるヤシの一種であり、樹液からは砂糖や酒を造るという。

思うに、国民詩人 Robert Burns はこの Toddy をいつも飲んでいたのかもしれない。日課のように。それは、疲れた体を癒すための Toddy であっただろう。心地よい酔いに、思わず、作詩の靈感を受けて、一気に書き上げる、というタイプの詩人 Burns であっただのかもしれない。その酔いの度合いに関わらず、どの作品にも乗っかっている「或る死体のような重み」(a dead weight) が気になる、というのが詩人 Keats の先輩詩人 Burns に関する感想である。

これによく似た体験は筆者にもある。それは、わが国の印象評論家小林秀雄が深く酔い、両脇を2人に支えられながら、千鳥足で、演台に近づく。そして彼はその演台に両手を突いて、両足を踏ん張り、背を伸ばし、間をおいてから、朗々と講演されたことである。一言半句も纏れることなく、フランス文学を語るのである。

一口、二口の Whiskey で、顔を赤らめ、「せめて、この機会に、一篇の陽気な sonnet」をと思ひ立ちながら、詩人 Keats はその詩作に打ち込もうとする。「しかし、それはそううまくいくものではない」、「思い通りになるものではない」という。「それにしても、Burns は Toddy を飲み、酔いながらも、またみだらな女たち (Bitches) と、くだを巻きながらも、詩作に打ち込むことができた」という。また「Burns は、口ぎたない下郎 (blackguards) と一緒に Toddy のグラスをくみ交わしながらも、作詩したこともあった」という。しかし、「そんな Burns は、振り返ると、みじめで



あった」というのが、詩人 Keats の感懐である。

ここにいう、Bitch(es) とは、Cobuild 版によると、If someone calls a woman a bitch, they are saying in a very rude way that they think she behaves in a very unpleasant way. と説明する。また、blackguard(s) は、別の Kaitakusha 版によると、a man who is quite dishonest and without honour, or who uses very bad language about or to a person. と説明する。これは、もとは黒服を着た従者あるいは品性の悪い従者の一団を意味したという。余計なことであるが、The pot is blackguarding the kettle. (「急須がやかんの悪口を言う。）」という諺がある。これは、「目糞鼻糞を笑う」という諺と同じで、「自分の欠点に気づかないで、他人の欠点を嘲笑う」という意味である。

そして、詩人 Keats は、「このような身の上の、一詩人の作品の中に、恐ろしく完全にその人の全人生を見ることが出来る」というのだ。しかも、「恰も、われわれは、隠れたものを見つける神であるかの如くに」という。

思うに、詩人 Keats は、

この部屋で貴方は一人きりで夢を見続けました  
と歌うのだろう。ここにいう、didst dream の didst は、一般動詞 dream とともに用いて、「強調」を意味する助動詞である。Thou は、2 人称単数 you の古語である。その所有格は thy, thine という。またその目的格は thee といい、複数形は ye という。Thou に伴う動詞は、are, have, shall, will, were がそれぞれ、art, hast, shalt, wilt, wert となるほか現在形、過去形に -st, または -est の語尾を付ける。例えば、ここにいう、where thou didst dream という風に、である。2 行目の in thine own room の所有格 thine は、your の古語で詩語であり、thy と同意であるが、母音で始まる語の前に用いられる。

Dream は自動詞である。I dream of home every night. (「毎晩国の夢を見る。)」という風に、前置詞 of か、about を用いる。この場合、about のほうが、of よりも、くわしく内容に立ち入ることが多いという。出口訳をみると、「その部屋であなたは……あなたの運命の日を夢みていた！」と読む。

つまり、出口は「Where thou didst dream, . . . of thy day of doom!」と読むのだ。これは可笑しい。

その理由は、Allott 版も、Barnard 版も、De Selincourt 版も、Houghton 卿版もともに、

Where thou didst dream alone on budded bays,

Happy and thoughtless of thy day of doom!

と歌うからである。つまり、御覧のように、on budded bays,の後を見ると、そこにコンマが使われているからである。この句読点の有無が重要である。

思うに、ここは先ず、詩人 Keats が、コンマを用いて歌うように、

Where thou didst dream alone on budded bays,

と読まべきだろう。思うに、ここにいう、dream on . . . は、《皮肉を込めて》(かないそうもないようなことを)「願い続ける」とか、「夢を見続ける」という意味の語句である。これは、しばしば命令形で使用されるという。

Budded bays について、Barnard は、「the poet's laurel wreath.」という注釈を添える。これは、榮譽のしるしとしての「詩人の月桂の花冠」を意味するのだろう。植物 laurel は、月桂樹 (*Laurus nobilis*) である。これは、南ヨーロッパ産楠木科の高木である。芳香があり、葉を乾かして香料とする。古代ギリシャ人は、ピシア競技 (the Pythian Games) の勝利者にこの木の葉を冠せたという。類似の木から区別するために、true laurel /lɔːrəl/ともいう。また、bay, bay laurel, bay tree とも呼ばれるという。これは、lover から異化された語 *lorel* である。これは、元、ラテン語の、*laurum* から派生した語で、laurel という原義を有するという。恐らくは、地中海起源の語であろう。

ここにいう、the Pythian Games というのは、古代ギリシャで、Apollo の祭りとして、Delphi で 4 年ごとに行われた民族的な大競技祭である。

植物 bay とは、月桂樹 (*Laurus nobilis*) のことである。これは、しばしば複数形で「月桂冠」という意味を持ち、勝利者などに与えられる「榮譽の花輪」をイメージする。これは、元、ラテン語で、*bacm* といい、berry と

いう原義を有するという。

然し、詩人 Keats は、この名詞 bays に、形容詞 budded を添えて、budded bays と定めるのだ。これは、恐らくは、「芽ぐんだ月桂冠」という意味だろう。思うに、詩人 Keats は、この「芽ぐんだ月桂冠」に託して、「詩壇に登場した、まだ若い詩人 Burns」を明示するのではあるまいか。

あるいは、Allott 説によると、これは「Poetic fame」であると注釈を添える。形容詞 poetic は、この場合、「ほめて」いるのであるから、筆者は、「詩人の名声」と読みたい。出口訳を見ると、「詩の名声」と読む。思うに、形容詞 poetic は、類似語 poetical と比べてみると、両者の厳密な区別はないが、一般に、前者 poetic は、詩の本質や内容に関する語である。それに対して、後者 poetical は、詩の形式に関して用いるという。

思うに、詩人 Keats は、皮肉を込めて、

ここで貴方は一人で芽ぐんだ月桂冠の夢を見続けた、  
と歌うのではないか。しかも、「かないそうもないような月桂冠の夢を見続けた」と歌うのではないか。これは、思うに詩人 Keats が、ウイスキーに酔い痴れる先輩詩人 Burns をいたく戒める詩興である、と思われる。そして、詩人 Keats は、

Happy and thoughtless of thy day of doom!

と歌うが、しかし、これは厄介である。思うに、ここは、分詞構文である。3行と4行が1つの文である、というのが筆者の解釈である。思うに、ここは、

(Being) happy and thoughtless of thy day of doom!

と歌うのだろう。主語は、無論、thou である。動詞は、were の古語、wert である。詩人 Keats は、先ず、(1) Thou wert happy. と歌い、そして、(2) Thou wert thoughtless of thy day of doom. と歌うのだろう。前者の形容詞 happy は、問題である。出口訳を見ると、「幸せに」と読む。これは、可笑しいと思う。「幸せに」と読むと、詩全体の文脈が通じなくなるからである。

筆者は、この形容詞 happy を、俗語としての、「ほろ酔いの」とか、「一

杯機嫌の」という意味を持つ形容詞 happy である、と読む者である。これが筆者の解釈である。例えば、come home a bit happy (「いささかご機嫌で帰宅する」) という風に、である。

思うに、詩人 Keats は、

然し貴方はいつもほろ酔い機嫌であった

と歌うのではないか。そして、重複するが、詩人 Keats は、(2) Thou wert thoughtless of thy day of doom. と規定する。思うに、形容詞 thoughtless は、「(……のことを) 十分考えない、顧みない《of, for...》」という意味を持つ形容詞 thoughtless である、というのが筆者の解釈である。出口訳を見ると、「煩いもなく」と読む。これも、また可笑しい。

思うに、詩人 Keats は、

貴方はいつも～を全く顧みなかった

と歌うのではないか。ここにいう、所有格 thy は、your の古語である。神が下す「最後の審判の日」を、英語で、the day of doom という。別に、doomsday という。これは、この世の終わりの「最後の審判の日」(the day of the Last Judgment) をイメージする。詩人 Keats は、定冠詞 the の代わりに、所有格 thy を用いて、thy day of doom と歌うのだ。これは、「貴方の最後の審判の日」とでも歌うのではないか。

名詞 doom は、類似語 destiny, fate などと比べて見ると、前者は、destiny や、fate がもたらす、破滅的な終局をさすという。例えば、He met his doom bravely. (「雄雄しく悲運の最期を迎えた。」) という風に、使用される名詞 doom であることを思うに、詩人 Keats は、

貴方の悲運の最期

とでも歌うのだろう。念のために、名詞 fate は、事の成り行きが、不条理で、人為的にはどうにもならないことを強調し、名詞 destiny は、事の成り行きの変更不能を強調するが、しばしばよい運命について用いるという。例えば、He became a man of destiny. (「運のいい男になった。」) という風に、である。面白い。

詩人 Keats は、一見すると、いつもアルコール中毒気味の先輩詩人 Burns

を、

貴方はいつもご自分の悲運の最期を全く顧みなかったと歌うのだろう。これが、筆者の解釈である。出口訳を見ると、「その部屋であなたは 詩の名声のうえに ただ独り、/ 煩いもなく 幸せに あなたの運命の日を夢みていた！」と読む。文脈はばらばらである。

意味不明。「詩の名声のうえに」というのは、on budded baysを指すのだろう。出口は、これを、前置詞句として読むのだと思われる。出口の、この解釈が、躰きの第一歩である。故に、出口が、残念なことに、「あなたの運命の日を夢みていた！」というの、thou didst dream of thy day of doom!を指す、という誤った解釈に至るのである。この誤った文脈を生かそうと、出口は、形容詞happyを、副詞「幸せに」と読み、また、形容詞thoughtlessを、副詞「煩いもなく」と読むのである。

詩人Keatsは、先ず、皮肉に、thou didst dream on budded bays,と歌う。そして、詩人Keatsは、分詞構文を用いて、(but thou wert) happy and thoughtless of thy day of doom!と歌い上げるのだと思う。重要なことは、詩人Keatsが歌う、be thoughtless of...という構文である。

思うに、詩人Keatsは、

あと千日の命である、この身は、おおバーズよ、  
いま、他ならぬ貴方ご自身の部屋の中に居ます、  
ここで貴方は一人きりで新芽の月桂冠の夢を見続けたが、  
何時もほろ酔いでご自分の悲運の最期を顧みなかった。

と歌い上げるのではあるまいか。これが「最初の4行連句」(the First Quatrain)の世界である。「起承転結」の「起」の世界である。スコットランドの国民詩人Robert Burnsは、1759年に生まれて、1796年に亡くなる。弱冠37歳の夭折である。その原因の大部分を「ウイスキー」である、と後輩詩人Keatsは歌う。農業労働で鍛えた身体を持ちながら、好きなウイスキーで、寿命を縮める結果となった、と詩人Keatsは嘆く。これは、ア

ルコール依存症の、詩人 Robert Burns の「悲運の最期」を悲しむ詩興である。

詩人 Keats は、1795 年に生まれ、1821 年に亡くなる。弱冠 26 歳の短命である。それを予告した、この sonnet の最初の行である。「あと千日の命である、この身は」と歌う詩人 Keats には、遺伝の不治の病結核がその肉体を蝕み始める。

そして、詩人 Keats は、それに続けて、

My pulse is warm with thine own barley-bree,  
My head is light with pledging a great soul,  
My eyes are wandering and I cannot see,  
Fancy is dead and drunken at its goal.

と歌う。Thine own barley-bree の own について、Barnard 説によると、

5 own 1876, Garrod (OSA), Allott; old 1848, G

という。1848 年に出版された、最初の詩集では、形容詞 old であったという。それが、1876 年に、Allott 等が、own に修正した、という。原稿では、thine old barley-bree と歌っていたというのは、面白い。Allott 版、Barnard 版、それに、De Selincourt 版、松浦版では、ともに、thine own barley-bree と歌うのだが、しかし、念のために、Houghton 脚版を見ると、

My pulse is warm with thine old barley-bree,

と歌うのである。面白い。

ここにいう、Garrod というのは、松浦によると、『ジョン・キーツ詩集』(The Poetical Works of John Keats) の、H. W. Garrod であるようだが、しかし、1951 年出版の研究社版『英米文学辞典』によると、彼はイギリスの文学者 Heathcote William Garrod (1878 -) であると紹介する。1878 年誕生の Garrod であれば、生まれる 2 年前の、1876 年に、というのは、辻褄があわない、と思うのであるが、これはどうしたものか。

なにはともあれ、詩人 Keats が歌う、名詞 barley-bree は、Barnard 説に

よると、

5 *barley-bree* malt liquor, whiskey.

という注釈を添える。Allott 説によると、これは、「Ale」であるという。松浦は、「Barley-bree = broth of Barley」という注釈を添える。松浦はこれを「大麦のスープ」と読む。

念のために、Crescent Books 版の *The Concise Scots Dictionary* を見ると、

*Barley-bree, -brie, -broo, n.* malt liquor; whisky.

と説明する。これは、上記の Barnard 説と同じである。それにしても、3人3様の解釈があって、面白い。Allott は、ale であると読む。「エール」は、重複するが、上面発酵法によるビール的一种である。これは、アルコール分約6度から平均8度前後である。(1)small ale とは、弱いエールのこと。(2)pale ale とは、淡色でホップが強い、パール・エールのこと。(3)mild ale とは、濃色でホップが弱く味が柔らかい、マイルド・エールのこと。(4)single ale とは、アルコール分が低い、シングル・エールのこと。(5)double ale とは、アルコール分が高い、ダブル・エールのことである。また、ale は、beer より上品な言葉であって、商用語であるという。

Barnard は、(1)malt liquor, (2)whiskey であるという。前者の malt liquor /li:kə/ とは、「麦芽醸造アルコール飲料」のことである。(2)whiskey については、既に上記で紹介しておいたように、ウイスキーで、大麦、ライ麦、トウモロコシなどに、麦芽を加え、発酵させて蒸留したもので、通例、アルコール度43-50%のものをいうのである。Whiskey, Whisky の2語に注意しよう。

出口訳を見ると、「わたしの脈搏は あなたの昔の大麦のスープで温かく」と読む。これは、Houghton 卿版の、old と同じである。また、松浦が読む、「大麦のスープ」(barley-bree) と同じであるのが、愉快である。しかし、出口訳の「脈搏は温かい」とは、どういうことなのか。それにしても、詩人 Keats が歌う名詞 pulse /pʌls/ は、厄介である。

脈搏とは、心臓が律動的に血液を押し出すことによって、起こる動脈中の圧力の変動のことで、その数は心臓搏動数に等しく、普通、1分間に70

ぐらいである、といわれている。病気その他によって、数・強さ・規則性に変動が起きるので、診断の指標となる脈をいう。

思い出すのは、Shakespeare 作『ハムレット』第三幕第四場の「王妃の私室」での、

Ecstasy!

My pulse, as yours, doth temperately keep time,

And makes as healthful music: it is not madness

That I have utter'd:

という、139行から142行前半までの、Hamletの台詞である。「狂気ですって！」と、Hamletは叫ぶ。そして、「僕の脈搏は正常に健康なリズムを打っています、あなたと同じように。今、僕が発したのは、狂気のたわごとではありません。」という台詞である。このように、The pulse beats. (「脈搏が打つ」)であれば、よくわかるが、しかし、My pulse is warm with thine own barley-bree,という、My pulse is warmをどう読めばよいのか、が問題である。思うに、後半は、

他ならぬ貴方のウイスキーで火照っている

と歌うのではないか。形容詞 warm は、(1)「〈体が〉(運動・飲酒などで)熱い、ほてる」という意味を持つ。例えば、be warm with wine (「ワインで体が火照っている」)という風に、である。また、別に、(2)形容詞 warm は、「〈体・血液などが〉恒温 [定温、常温、温血] の」という意味を持つ。後者は、どうも、warm-blood (「温血動物」)とか、warm-blooded animal (「温血動物」)というように、動物用語としてよく用いられるようである。

思うに、詩人 Keats は、この「2番目の4行連句」の文脈を見ると、どうも、前者の意味を用いて、

僕の脈搏は他ならぬ貴方のウイスキーで火照っている

と歌うのではあるまいか。アルコール類を一切嗜まない Keats であるが、しかし、既に上記で紹介しておいた、友人 Reynolds 宛の書簡の示すように、

We went to the Cottage and took some Whiskey.



と言うのである。「そこで、そのとき、詩人 Keats らはウイスキーを飲んだ」という。なお、それに続けて、

I hate the Rascal—his Life consists in fuz, fuzzy, fuzziest—He drinks glasses five . . . he is mahogany faced old Jackass who knew Burns—He ought to have been kicked for having spoken to him. He calls himself “a curious old Bitch”—but he is a fat old Dog—I should like to employ Caliph Vatheck to kick him.

と伝えている。これは、松浦の注釈からの引用である。「僕は、この世の中で、烏合の衆ほど嫌いな奴はいない」という。しかし、次の英文の、fuz なる語は不明である。ご教示を賜れば、有難い。形容詞 fuzzy は、しばしば酒に酔った結果、「頭がぼんやりした、ぼうっとした、支離滅裂な」という意味を持つことを承知している。例えば、a fuzzy thinker（「はっきり物が考えられない人」とか、あるいは、become fuzzy after one drink（「1杯飲んで頭がもうろうとする」という風に、使われる形容詞 fuzzy である。故に、fuzzy, fuzzier, fuzziest と変化することも、承知している。がしかし、fuz という語は不明である。これは、恐らくは、fuzz のことではあるまいか。自動詞 fuzz には、アメリカの俗語として「酔っ払う」という意味があるからである。

思うに、詩人 Keats は、友人 Reynolds に宛てた、書簡の中で、この ale-house の「店長奴の生活は、日夜、アルコール、アルコールで酔っ払い、いつも頭がぼんやりしていて、全く滅茶苦茶な支離滅裂のアルコール依存症から成り立っている」と知らせる。「店長奴は、5杯のグラスを空けた」と呆れる。また「店長奴の顔は赤褐色で、バーンズのことをよく知っている、まるで老いた雄のロバ顔だ」と嫌悪する。「店長奴に話しかけたのだが、そのとき、奴はまるで蹴飛ばされた者同然である」と頷く。これは、奴がまともに受け答えの出来ないほどに酔っ払っていて、頭がぼんやりしていたという意味だろう。

更に、詩人 Keats は、「奴自身、1匹の好奇心の強い老いた雌犬だ」とぼやく。「しかも、奴は1匹の丸々太った老犬だ」と付け加えるのだ。そして、

詩人 Keats は、「奴を椅子から蹴落とすために、是非とも Caliph Vatheck を雇いたいのだが」と躍起になる。がしかし、ここにいう、Caliph Vatheck は、筆者には不明である。是非、ご教示を賜りたい。

これは、なによりも、酔っ払いを生理的に毛嫌いする John Keats その人である。その理由も、これで、明白だろう。更に、De Selincourt 版によると、

Then we proceeded to the Cottage he was born in—there was a board to that effect by the door side—it had the same effect as the same sort of memorial at Stratford on Avon. We drank some Toddy to Burns’s Memory with an old Man who knew Burns—damn him and damn his anecdotes—he was a great bore—it was impossible for a Southron to understand above five words in a hundred.

と言及する。詩人 Keats は、Shakespeare の生家を訪れたときの素晴らしい印象が、Burns の生家を訪れたときの素晴らしい印象に重なることを述懐し、「2人が、バーンズをよく知っている老人と一緒に、バーンズの名声のために Toddy で祝杯をあげた」という。ここにいう、前半の he は、無論、先輩詩人 Robert Burns その人を指す。がしかし、後半の him, he は、Burns をよく知っている an old Man を指すことに、注意しよう。そして、詩人 Keats は、いつの間にか、たぶん酔いが回るころになると、その老人を「いまいましい奴だ」(God damn him.) と罵る。「いまいましい奴の秘話だ」(God damn his anecdotes.) と呪う。「奴は、全く性に合わない奴だ」(he was a great bore.) と扱き下ろす。

しかし、詩人 Keats は、理論的にも、「イングランド南部生まれの自分にとって、上記の5文字 (he was a great bore.) の真の意味を理解することは全く不可能である」と苛立つのである。「その5文字の意味を理解するには、100語をもって説明する」必要があるという。これは、イギリスとスコットランド両国の文化の相違を告白する、重要な言葉であると思われる。更に、De Selincourt は、それに続けて、

There was something good in his description of Burns’s melancholy the

last time he saw him. I was determined to write a sonnet in the Cottage—

I did—but it was so bad I cannot venture it here.

と論及する。「奴は最後に Burns に会った、そのときの Burns の憂鬱の描写がなかなか上手かった」という。そのとき、「詩人 Keats は、その、Burns の生家で、一篇の sonnet を書く決心をした」という。重複するが、「詩作したが、」「しかし、余りに愚作なので、それをここに敢えて危険を冒してまで送ることが出来ない」という。

なにはともあれ、詩人 Keats は、

僕の脈搏は他ならぬ貴方のウイスキーで火照っている、

と歌うのだろう。そして、詩人 Keats は、それに続けて、

My head is light with pledging a great soul,

と歌う。動詞 pledge は、古語で、「……のために乾杯する」という意味を持つ他動詞ではあるまいか。例えば、pledge a beautiful girl（「美人に乾杯する」）という風に、である。ここにいう、a great soul とは、「一人の偉大な人」という意味だろうか。これは、無論、先輩詩人 Robert Burns その人を指すのだと思う。名詞 soul は、しばしば修飾語・数詞を伴って、親しみや、哀れみを示して、文語で、「人、人間」という意味となる。例えば、a kind soul（「親切な人」）とか、my good soul（「いい子だから」）という風に、である。出口訳を見ると、「わたしの頭は 偉大な魂に誓うことで軽くなる」と読む。

形容詞 light は、文脈から見て、「目まいがする、頭がふらふらする」という意味を持つ語であろうか、と思われる。思うに、詩人 Keats は、

僕の頭は一人の偉人に乾杯することでふらふらする、

と歌うのだろう。「乾杯」とは、杯のアルコールを飲み干すことである。それは、宴会でなくても、詩人 Burns の生家の部屋の中で、Burns の自画像に向かって、杯を捧げて、慶事を祝して、そのアルコールを飲み干すものであっても、「頭がふらふらする」と歌うのだろう。そして、詩人 Keats は、

My eyes are wandering and I cannot see,

と歌う。動詞 wander は、「〈視線などが〉取りとめのない動き方をする、  
当てもなく動く」という意味だろう。例えば、His eyes wandered to her.  
(「彼の視線はあちこちさまよったあと、彼女の方に向けられた。）」という風に、  
である。出口訳を見ると、「わたしの目は あたりを見まわすが、見るこ  
とができない」と読む。不可解な訳である。思うに、詩人 Keats は、

僕の視線はあちこちさまよっていて何も見えない、

と歌うのではないか。これは、乾杯したあとの、酔った詩人 Keats の視線  
をイメージする詩境である。想起するのは、William Wordsworth (1770 -  
1850) が歌う、

I wandered lonely as a cloud

That floats on high o'er vales and hills,

という詩行である。「われひとりさまよった」という地上の孤独な詩興で  
あるが、しかし、見ると、天上に「一片の雲」が浮かんでいる、という  
「地と天」が「対」になって歌われているのが、この、詩人 Wordsworth の  
特色である。それに対して、詩人 Keats は、先輩詩人 Burns と一定の隔た  
りを置いて、向かい合っている世界である。

詩人 Keats は、

Fancy is dead and drunken at its goal.

と歌うのだ。問題は、dead and drunken, である。これは、恐らくは、  
dead-drunken (「酔いつぶれた」という形容詞を踏まえた、詩人 Keats の造語  
であろうかと、思う。というのは、dead and done with (「〈事が〉すっかり  
終わって、けりがついて」という意味の語句を想起するからであり、また、  
dead and alive (「〈人が〉意気消沈して、塞ぎこんで」という意味の語句を思  
い出すからである。この他にも、dead and buried (「完全に死滅した」とい  
う語句もまた、然りだが、しかし、詩人 Keats が歌う、dead and drunken  
という言い方は、筆者には、初めてである。全く検討がつかないし、見当  
たらなからである。

それにしても、形容詞 drunken は、通例、限定形容詞として使われるも  
のである。例えば、a drunken man (「酔っ払い」という風に、である。決

して、a drunk man とは、いわない。この drunk は、主として、叙述形容詞として用いられるからである。例えば、He was drunk. (「彼は酔っている。）」という風に、である。He was drunken. とは、言わないこと等を思うに、dead and drunken という語句は、詩人 Keats の造語であると思われる。ご教示を賜りたい。

思うに、dead-drunkenness (「泥酔」) という名詞を踏まえてみると、詩人 Keats は、

空想力はその詩作のゴールで全く酔いつぶれている。

と歌うのではないか。ここにいう、at its goal の、its は名詞 fancy を指す所有格である。がしかし、それは、詩人 Burns の想像力をいうのか、それとも、詩人 Keats の想像力を明示するのが、問題である。出口訳を見ると、「空想は消え失せ 滅びている」と読む。詩人 Keats の歌う、at its goal (「その詩作のゴールで」) が省かれているのは、気になる。

名詞 fancy は、類似語 fantasy, imagination などと比べてみると、前者は、気まぐれな空想で面白くはあるが、imagination の創り出すものよりも深みや、感動が少ないという。後者の fantasy は、現実と隔絶した途方もない空想をいい、imagination は、「創造的想像力」の意味である。心の中で現実の光景や、体験の記憶が混ざり合い、そこから新しく独自のものが作り出されることをいう。Fancy が移り気で、軽薄なのに対して、現実の新しい見方を生み出す高尚な心の働きをいう。fancy は、中英語で、*fan (t) sy* といい、*fantasie* 「空想 (fantasy)」の中間音節省略異形であるという。

詩人 Keats は、Toddy を飲み、顔を赤らめて、

僕の脈搏は他ならぬ貴方のウイスキーで火照っている、

僕の頭は一人の偉人に乾杯することでふらふらする、

僕の視線はあちこちにさまよっていて何も見えない、

空想力はこの詩作のゴールで酔いつぶれてしまった。

と歌うのだろう。これが、「2 番目の 4 行連句」(the Second Quatrain) の世

界である。「起承転結」の「承」の世界である。思うに、これは、詩人 Keats 自身が「他ならぬ貴方 (Burns) のウイスキー」を嗜んだときの、不覚にも、酔っ払った失敗談を歌う詩興である。

そして、詩人 Keats は、それに続けて、

Yet can I stamp my foot upon thy floor,  
Yet can I ope thy window-sash to find  
The meadow thou hast tramped o'er and o'er,  
Yet can I think of thee till thought is blind,

と規定する。副詞 yet は、御覧のように、肯定文での使用であるから、酔っていても「今なお」とか、「まだ、やはり、依然として」という意味を持つ、副詞 yet であろうか。この場合は、副詞 stillの方が普通であるが、しかし、このように yet を用いると、驚きなどの「感情的色彩」を帯びるという。例えば、She is waiting yet. (「あら、まだ待っているわよ。）」という風に、である。

この副詞 yet は、御覧の通り、3回も繰り返され使われるのだ。それも、各文の文頭に歌われるのである。動詞 stamp は、Cobuild 版によると、If you stamp or stamp your foot, you lift your foot and put it down very hard on the ground, for example because you are angry or because your feet are cold. と説明する。Because you are angry (「腹立して」) というイメージは重要である。思うに、詩人 Keats は、アルコールで命を縮めた、詩人 Burns の悲運の最期を哀れむと同時に、彼の早死に立腹するのだと思われる。故に、詩人 Keats は、哀憐を通りこして、

今なお僕は腹立し貴方の部屋の床を踏み鳴らすことも出来るし、と歌うのだろうか。前置詞 upon には、形式張った、古めかしい響きがある。一般的に、特に、口語では onの方が好まれる。しかし、音調や、韻律などの関係で upon が好まれるという。この場合は、前置詞 upon に託して、特に「動作」を強調する語であろうかと思われる。出口訳を見ると、

「しかもわたしは あなたの床に足を踏みつけ」と読む。

そして、詩人 Keats は、

Yet can I ope thy window-sash to find

The meadow thou hast tramped o'er and o'er,

と定める。動詞 ope は、open の詩語で文語の他動詞である。名詞 window-sash の、sash とは、ガラスをはめ込む窓の枠を意味する。詩人 Keats は、

今なお僕は貴方の部屋の窓ガラスを押し開けて

と先ず歌うのか。動詞 tramp は、Cobuild 版によると、If you tramp somewhere, you walk there slowly and with regular, heavy steps, for a long time. と説明する。後半の、slowly and with regular, heavy steps, for a long time というイメージが重要である。詩人 Keats は、「ゆっくりと、規則正しい重い足取りで、長時間」歩く詩人 Robert Burns を歌いあげるのだろうか。思うに、これが、詩人 Burns の日課であったのかも知れない。というのは、詩人 Keats は、ここに、over and over（「何度も何度も、何度も繰り返して」）と歌うからである。それも、詩作に耽る詩人 Burns の姿を明示するのだと思われる。

今なお僕は貴方がのろい通常の重い足取りで歩き続けた

例の牧草地を捜し出そうと窓ガラスを押し開けることも出来るし、

と歌うのではないか。出口訳を見ると、「窓をあけて あなたがとぼとぼ歩いた / 牧場を見ることができる、」と読む。

更に、詩人 Keats は、

Yet can I think of thee till thought is blind,

と歌う。後半の、till thought is blind, は厄介である。出口訳を見ると、「しかも 思想が暗くなるまで あなたを想うことができる、」と読む。「思想が暗くなるまで」とは、一体、どういうことなのか。思うに、形容詞 blind は、俗語で、「(酒・麻醉で) 酔っ払った」というイメージを伝える形容詞ではあるまいか。例えば、be blind to the world（「泥酔している」）という風に使われる語である。また、His mind was blind with sorrow.（「悲嘆に暮れて呆然としていた。」）という風に、である。動詞 think of 一は、「一この

とを考える、熟考する」という準他動詞である。

鬼塚幹彦は、『英文法は活きている』の中で、前置詞 of について、「of は名詞の接着剤」であるという。「胎児と母体をつなぐ“ヘソの緒”」と形容した方が実感に近いかも、という。そして、「of を用いると、どこことなく、もったいぶったような堅い感じが出る」という。意味深い前置詞 of である。詩人 Keats は、敢えて、Yet I can think of thee . . . と歌うのである。決して、Yet I can think about thee . . . と歌うのではない。

また、動詞 think の名詞は、thought である。詩人 Keats は、この詩行に、この、両者を歌い上げているのである。Cobuild 版によると、If you think of someone or something as having a particular quality or purpose, you regard them as having this quality or purpose. と説明する。後半の「as having a particular quality or purpose」が重要である。思うに、前置詞 of に託して、先輩詩人としての、また、スコットランドの国民詩人としての Robert Burns を念頭に置きながら、後輩詩人 Keats は 高らかに、「今なお貴方を思い浮かべることが出来る」と歌うのだろう。

動詞 think は、「思考」の代表語である。「思う」と「考える」全体を意味する便利な動詞 think であり、また、名詞 thought である。

思うに、詩人 Keats は、

今なお僕は腹立し貴方の部屋の床を踏み鳴らすことも出来るし、  
今なお僕は貴方がのろい通常の重い足取りで歩きつづけた  
例の牧草地を捜し出そうと窓ガラスを押し開けることも出来るし、  
今なお僕は思考力が呆然となるまで貴方を考えることも出来るし、

と歌うのだろう。これが「3番目の4行連句」(the Third Quatrain)の世界である。「起承転結」の「転」の世界である。詩人 Keats は祝杯を挙げたからといって、酔いつぶれるほど飲まない。それも、顔を赤らめ、頭が少しふらふらする程度である。まさに心地よい酔いである。適度のウイスキーや、適度のビールであれば、Robert Burns もスコットランドの農民詩人として、



もっと長く活躍することが出来たであろうに、と詩人 Keats は嘆く。長生き出来れば、貴方は、活発に、今もなお、部屋の床を踏み鳴らすことも出来るだろうし、また、のろい通常の重い足取りで、貴方は、今もなお、牧草地を散策することも出来るだろうし、更に、思考力が呆然となるまで、貴方は、今もなお、詩作に耽ることが出来るだろうに、と詩人 Keats は愚痴るのである。Toddy は、貴方の命を縮めた、と詩人 Keats は無念がるのだと思う。哀れである。

Allott は、この 12 行目の内容について、

12. Some of K.' thoughts are in his journal—letter to Reynolds:  
'[Burns's] Misery is a dead weight upon the nimbleness of one's quill—I tried to forget it—to drink Toddy without any Care—to write a merry Sonnet—it wont do—he talked with Bitches—he drank with Blackguards, he was miserable—We can see horribly clear in the works of such a man his whole life, as if we were God's spies [see *King Lear* v iii 17]' (LI 325).

と言及する。ここにいう、4 行目の、it wont do というのは、恐らくは、it won't do の誤植であろうかと思う。これは、友人 Reynolds に宛てた、詩人 Keats の書簡の中の一部である。「バーンズのみじめさは、人は軽快なペンの運びで作詩するのに対して、死んだような重さである」という。「詩人 Keats は先輩詩人 Burns の、そんなみじめさを忘れようとした」といい、「忘れるために、詩人 Keats は、なんの注意や用心することもなく、Toddy を試飲した」という。そして「陽気なソネットを試作しようとしたが、」といい、案の定「うまくいかないものだ」という。「Burns は、というと、酔っ払った淫らな女たちと一緒にあって、くだくだと喋っていた」という。「Burns は、ごろつきの輩たちとも飲んだ。彼は気の毒だ」ともいう。「我々は、恐らくは、呑み助の詩人 Burns の作品群の中に、彼の全人生を、はっきり見ることが出来る」という。「それも、まるで我々は神のお使いであるかのように、見える」というのだ。

詩人 Keats の最後の言葉、すなわち、as if we were God's spies というのは、

Allott 説によると、これは、William Shakespeare 作『リア王』(*King Lear*) 第五幕第三場の、

And take upon's the mystery of things,

As if we were God's spies

という、リア王の台詞から引用したものであるという。「神のお使いのようにこの世の秘密に通じている / ふりをして語ろう」という、このリア王の台詞を踏まえて、詩人 Keats は、「まるで神のお使いのように、先輩詩人 Burns の秘密に通じているふりをして語る」というのだろう。

そして、詩人 Keats は、厳粛に、

Yet can I gulp a bumper to thy name—

Oh, smile among the shades, for this is fame!

と歌い収めるのだ。ここにいう、a bumper について、Allott は、「a toast.」であるという注釈を添える。Barnard は、この、名詞 bumper について、

A cup or glass filled to the brim, especially for a toast.

という注釈を添える。思うに、これは、特に乾杯のときなどの「満杯のグラス」をイメージするのであろうか。例えば、Fill me a bumper. (「なみなみついでくれ。)」という風に使われる名詞 a bumper である。動詞 gulp /gʌlp/ は、一見すると、擬声語のような動詞で、「ごくりと [ゴクゴク] 飲む」という意味を持つ他動詞である。思うに、詩人 Keats は、

今なお僕は、バーンズ先生乾杯、と満杯を飲み干すことが出来る—  
と歌うのではあるまいか。出口訳を見ると、「けれどもなお あなたの名まえに対して 満盃を飲み干すことができる、—」と読む。面白いのは、前詩行、即ち 12 行目の最後 blind は、コンマが使用されていることである。そして、ここにも、副詞 yet が文頭に使われていることである。これは、接続詞 yet であると読めないことはないが、しかし、筆者は、やはり、これを、前の「4 行連句」のコンマに続く、副詞 yet であると読みたい。これが筆者の解釈である。

このダッシュは、どういう意味だろうか、と考えると、面白い。思うに、このダッシュの間は、詩人 Keats が農民詩人 Burns の身の上を考えているのだと思われる。

問題は、出口訳の「満盃」の「盃」である。盃は俗字であるからである。筆者は、「満杯」と歌い上げたい。杯は、不の転音が音を表わし、増し加えるという意味の語源「倍」からきているという。台の上部に酒などを注ぎ入れるものが増しついで（附）いる木製品、さかずきの意味である。「杯」は、酒をのむ器である。もとは木を曲げて造ったものをいう。

そして、詩人 Keats は、思い余って、最終行を、

Oh, smile among the shades, for this is fame!

と歌う。ここは、詩人 Burns が詩作に耽った部屋である。ここには、詩人 Burns の詩作に必要な愛好の品物がある。机、椅子、ペン、聖書、等などがある。しかも、ここは、太陽の光線が直接当たらない薄暗い部屋である。そのために生ずる周囲の暗さよりも暗く、しかも湿度の低い場所でもある。この陰を、英語で、shade という。

しかし、詩人 Keats は、あえて、among the shades と歌い定める。the shades の、複数形-s に、注意しよう。これは、「物陰で」という意味だろうか。勿論、それは椅子の陰を明示するし、机の陰や、ペンの陰や、聖書の陰などを明示するのだらう。

思うに、詩人 Keats は、前半を、

おお、この物陰の中で微笑んでおくれ、

と歌うのか。こう解釈すると、後半の、for this is fame! という指示代名詞であり、且つ単数形の this は、詩人 Burns の生家を明示する代名詞であると、読めるだらう。そうすると、後半は、

ここは詩人バーンズの誉れある生家だから!

と読めないことはない。というのは、彼らにとって、「陰」(shade) は、「夜」をイメージするからである。想起するのは、Shakespeare 作『ヘンリー四世第一部』第一幕第二場の、Sir John Falstaff が語る、

Let us be Diana's foresters, gentlemen of the shade, minions of the

moon;

という台詞である。「ダイアナ様のお狩場番、月の女神のお情け受けて、夜の紳士たァ、この俺たちのこった」というイメージである。彼らのいう、shade = darkness = night という一連のイメージは重要であるからだ。

それとも、文語 the Shades には、死者の霊の住みかとしての「黄泉の国」というイメージがあるのだが、詩人 Keats は、この黄泉の国を明示するのだろうか。また、『ギリシャ・ローマ宗教』での「黄泉の国」(the Hades) に住む「死霊」というイメージもある。『ギリシャ神話』における「ハデス」であり、これは「死者の霊のいる下界、死者の国、黄泉の国、冥府」という世界である。ここには、生者と、死者の国の境に the Styx/stík/ という川があり、渡し守 the Charon/kærən/ が死者を船で渡したという。この死者の国の支配者、つまり、冥府の王は Plute/plú:tou/ であるという。

ここにいう、『ギリシャ神話』の「ステュクス川」(the Styx) とは、「三途の川」のことである。黄泉の国を七周するという。渡し守によって、死者はこの川を渡り、神々はこの川にかけて誓いを立てるという。そして、『ギリシャ神話』の「カロン」(the Charon) とは、死者の魂を船に乗せて冥土の川を渡すといわれる渡し守をいう。長いほおひげをつけ、汚れたみすぼらしい衣服を着た老人の姿で表されているという。

思うに、別に、詩人 Keats は、前半を、

おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、

と歌い、後半の指示代名詞・単数形 this は、前行の「祝杯」をイメージして、

これは貴方の誉れを祝う乾杯であるから！

と読むことも出来ようか。このように、両者の解釈も成り立つと思う。これが筆者の解釈である。重複するが、詩人 Keats は、

おお、この物陰で微笑んでおくれ、ここは貴方の誉れある生家であるから！

と歌い収めるのか。それとも、

おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、これは貴方の誉れを祝う乾杯だか

ら！

と歌い収めるのか、が問題である。両者とも、絶妙な詩興であるから、筆者には決めがたい。ここは、詩題から判断するしかないのだろうか、と思われる。それは、1. 「この身はあと千日の命」 (“This mortal body of a thousand days”) と、2. 「バーンズの生家にての作詩」 (“Written in the Cottage where Burns was Born”) という2種類であることを、既にも上記に指摘した。前者の詩題であれば、無論、後者の、

おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、これは貴方の誉れを祝う乾杯だから！

と、詩人 Keats が厳格に歌い収めるのだと思われる。その理由は、そこに「詩人 Burns の悲運の、いたわしい命」が色濃く漂う詩境である、と思われるからである。また、後者の詩題であれば、勿論、前者の、

おお、この物陰で微笑んでおくれ、ここは貴方の誉れある生家であるから！

と、詩人 Keats が声高らかに歌い収めるのだと思う。というのは、そこに「詩人 Burns の懐かしい面影」を留めている詩境である、と思うからである。故に、筆者は、この拙文のタイトルの示すように、前者の「詩人 Burns の悲運の、いたわしい命」を重ねて、後輩詩人 Keats は、「一抹の哀感」を明示する、絶妙な作品である、と評価する者である。これが筆者の解釈である。しかし、後者の詩境もまた捨てがたいことを、再度、強調しておきたい。

今なお僕は、バーンズ先生乾杯、と満杯を飲み干すことが出来る――

おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、これは貴方の誉れを祝う乾杯だから！

(おお、この物陰で微笑んでおくれ、ここは貴方の誉れある生家であるから！)

と詩人 Keats は歌い収めるのではあるまいか。これは、「最後の2行連句」(the last couplet) の世界である。「起承転結」の「結」の世界である。これ

は、イギリス人好みの、一種の「警告」である。つまり、戒めを告げる世界である。

思うに、詩人 Keats は、ここに、彼らの「諺」を想起するのではあるまいか。それは、

The gifted die young.

であり、また、

Whom the Gods love die young.

という諺である。前者は「才子短命」といい、後者は「神々に愛される人間は早死にする」という意味であろうか、と思う。

最後に、心して静かに、名品「この身はあと千日の命」を口ずさんでみたい。

あと千日の命である、この身は、おおバーズよ

いま、他ならぬ貴方ご自身のこの部屋の中に居ます、  
ここで貴方は一人きりで新芽の月桂冠の夢を見続けたが、

何時もほろ酔いでご自分の悲運の最期を顧みなかった！

僕の脈搏は他ならぬ貴方のウイスキーで火照っている、

僕の頭は一人の偉人に乾杯することでふらふらする、  
僕の視線はあちこちにさまよっていてなにも見えない、

僕の空想力はこの詩作のゴールで酔いつぶれてしまった。

今なお僕は腹立し貴方の部屋の床を踏み鳴らすことも出来るし、

今なお僕は貴方がのろい通常の重い足取りで歩きつづけた  
例の牧草地を捜し出そうと窓ガラスを押し開けることも出来るし

今なお僕は思考力が呆然となるまで貴方を考えることも出来るし、  
今なお僕は、バーズ先生乾杯、と満杯を飲み干すことも出来る——  
おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、これは貴方の誉れを祝う乾杯だから！  
(おお、この物陰で微笑んでおくれ、ここは貴方の誉れある生家であるから！)

以上、この玉詩「この身はあと千日の命」を口ずさみ終えた後、筆者の

思うこと・感じることは、

(1) 友人 Benjamin Bailey 宛の、詩人 Keats の手紙の中に、Keats 自身、

I had determined to write a Sonnet in the Cottage, I did but lauk it was so wretched I destroyed it. (松浦著『キーツのソネット集』、p. 132.)

と告白しているように、この作品は「余りに悲惨な出来具合であるので破棄した」という運命の作品である、ということだ。ここにいう、形容詞 wretched は、類似語 miserable, sorry と比べてみると、前者は極端に悲惨なありさまをイメージする。特にそれが外目にも明らかな場合に用いる形容詞 wretched であるという。それに対して、形容詞 miserable は不幸や苦悩のような内面的・精神的な側面を指すことが多いという。形容詞 sorry は(外的な状況が)見る者にむしろ軽蔑の念を感じさせるほどにみすぼらしいという。

それにしても、詩人 Keats のいう、I did but lauk という、動詞 lauk とは、一体、どういう意味なのか。是非とも、ご教示を賜りたい。スコットランド語で、動詞 lauch がある。これは、英語の to laugh という意味を持つ動詞 lauch であるのだが。

なにはともあれ、詩人 Keats 自身、破棄したという、この sonnet は、幸運にも、その時、スコットランド徒歩旅行に同伴した友人 Charles Armitage Brown (1786 - 1842) が、それを旅行手帳に書き写しておいたお陰で、それが日の目を見るに至ったのである。

詩人 Keats が、この sonnet を破棄した理由は、いみじくも、運命の、上記の 14 行詩を見ると、詩人 Keats は、8 行目に、Fancy is dead and drunken at its goal. (「僕の空想力はこの詩作のゴールで酔いつぶれてしまった」と歌いあげていることである。「この詩作のゴール」というのは、言うまでも無く、最終行、即ち、Oh, smile among the shades, for this is fame! を指すのだろう。それ故に、思うに、詩人 Keats の頭が、あの Toddy で、酔い、ふらふらしながら、「おお、黄泉の国で微笑んでおくれ、これは貴方の誉れを祝う乾杯だから！」と歌いたかったのか、それとも、「おお、この物陰で微笑んでおくれ、ここは貴方の誉れある生家だから！」と歌い収めたかった

のか、不明のまま、酔いつぶれてしまったのかもしれない。定かではないが、しかし、これは、やはり、問題である、と詩人 Keats 自身、そう思ったから、破棄するに至ったものと思われる。それも、「他ならぬ貴方のウイスキー」を飲んだお陰で、「空想力が最終行で酔いつぶれてしまった」と歌っていることも、頷ける。

Allott が、

I tried to forget it—to drink Toddy without any Care—to write a merry  
Sonnet—it won't do—

と紹介する。「陽気なソネットを試作しようとしたが、うまくいかない」と詩人 Keats は嘆く。それは、重複するが、「他ならぬ Burns の愛する Toddy」を不注意に飲んだためだ、という。

松浦説によると、

We went to the Cottage and took some Whiskey—I wrote a sonnet for  
the mere sake of writing some lines under the Roof—they are so bad I  
cannot transcribe them—

と、友人 Reynolds 宛の、詩人 Keats の書簡の一部を紹介する。「2人が Burns の生家に行って、ウイスキーを飲んだ」という。「詩作してみたが、不出来なので、それを紹介することは出来ない」と吐露するのも、ウイスキーが原因であるという。喩え、whiskey は、中世ラテン語の、*aqua vitae* からの派生語で、water of life という原義を有するものであっても、詩人にとって、命である、想像力を破壊するものだと、詩人 Keats は体験上、真面目に表白していることである。それは、喩え、Toddy (ウイスキー、ラム、ブランデーなどに水か湯を加えた飲み物) でも、然りだという。好みに応じて、時には、砂糖、丁子、シナモン、ナツメグなどを加える飲み物でも、駄目だという。

De Selincourt 版によると、

We drank some Toddy to Burns's Memory with an old Man who knew  
Burns . . . I was determined to write a sonnet in the Cottage—I did—but  
it was so bad I cannot venture it here.



と言及する。これは、Houghton 卿版のそれと全く同じである。これは、De Selincourt 説によると、1818年7月13日付けの、弟 Tom Keats に宛てた、兄 John Keats の書簡の中の一部であるという。「2人は、詩人 Burns をよく知っている老人と一緒に、Burns 先生乾杯、と祝杯を挙げた」という。「詩人 Keats は、Burns の生家で一篇の sonnet を詩作しようとした。出来上がったが、不完全だったのであえて公表することを控えた」という。

このように、詩人 Keats は、この一篇の sonnet に関して、3人宛ての3様の3通の手紙で、失敗作品であることを表明するのだ。一つは、弟 Tom Keats に宛てた手紙であり、二つ目は、友人 Benjamin Bailey 宛の手紙である。三つ目は、親友 John Hamilton Reynolds に出した手紙である。

(2) 「何時もほろ酔い気分で自分の悲運の最期を顧みなかった」と、詩人 Keats は歌い、先輩詩人 Robert Burns の夭折をいたく嘆く詩興の、sonnet であるということである。貴方は、まだ、37歳の身ではないか、と詩人 Keats は悲嘆する。この、詩人 Burns の短命に託して、詩人 Keats は自分の、「この身はあと千日の命」を切々と、哀れ深く重ねているのが、辛い限りである。しかも、詩人 Keats は、この「千」という数字に託して、神の言葉を踏まえ、「神の恵みを施す」詩人 Keats であることを明言するのである。これは、絶妙な詩境である。見事である。

(3) ここに想起するのは、彼らの、以下の諺である。それは、

The gifted die young.

という諺であり、また、

Whom the gods love die young.

という諺である。前者は、「才子短命」という意味であろう。「才子」とは、才知のすぐれた人を指す。頭がよく働き、目立った才能がある人のことである。別に、「才人」ともいう。また、「佳人薄命」(Beauties die young.) ともいわれる。これは、美人はとかくふしあわせなことが多いことをいう。「花は美しいものから順に萎んでゆく」(The fairest flowers soonest fade.) ともいう。まさに、「美しいものは花のように色あせていく」(Beauty fades like a flower.) ものである。「美は最初に死ぬ」(Prettiness dies first.) ものであるよ

うに、「才人」もまた然りであるという。

更に、「才子多病」ともいう。才子はとかく体が弱く、病気がちであることをいう。他に、「才子に倒れる」ともいう。これは、才子は才知を頼むあまりにかえって、失敗しがちであるという。面白い。

後者もまた、前者のそれと同じように、「才子短命」を意味するのだろうが、しかし、嬉しい事に、「神々に愛される人間は早死にする」ということである。これは、その国の、ある地域に語り継がれている、土俗信仰の齋す、古い教訓であるかもしれない。勿論、「死ぬる子は眉目よし」(Good and pretty children die young.) という諺を筆者はよく承知している。

(4) また、「生き身は死に身」であるという。これは、「生あるものには必ず死がある」(He that has been born must die.) という意味であろう。「どんなに長生きの人も、いつかは死がやってくる」(They that live longest must die at last.) ものである。これを、No mortal escapes death. (「生き身は死に身」) という。ここに想起するのは、『旧約聖書』の「詩篇」(“The Book of Psalms”) 第九十篇第十節に、

The days of our years are threescore years and ten; and if by reason of strength they be fourscore years, yet is their strength labour and sorrow; for it is soon cut off, and we fly away.

という神の言葉である。「われわれのよわいは70年にすぎません。」という。「あるいは健やかであっても80年でしょう。」という。「しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われわれは飛び去るのです。」という。これは、「人間の寿命70年、あるいは健康であっても80年」であるという、神の人Mosesの言葉である。

ここにいう、Moses /móuziz/ (「モーセ」) は、ヘブライの指導者であり、『旧約聖書』の「出エジプト」(“The Second Book of Moses, Called Exodus”) の示すように、イスラエル人のエジプト脱出を指導し、カナン (Canaan) の地へ導いた預言者であり、また、シナイ (Sinai) において神から「十戒」を含む律法を授けられた立法者でもある。

このように、彼らの、人間の寿命は70歳であるという。健康であれば、

80歳であるという。詩人 Robert Burns は37歳の短命である。詩人 John Keats は、イギリスの詩人で、批評家の Edmund Charles Blunden (1896 - ?) が、『ジョン・キーツ伝』 (*John Keats*) の初めに、

In 1795, perhaps on 29 or 31 October (though conjecturally in June), John Keats was born in London.

と紹介する。アメリカの女流詩人 Amy Lowell (1874 - 1925) は、『ジョン・キーツ伝』 (*John Keats*) の中に、

There is some doubt as to whether October twenty-ninth or October thirty-first was his birthday.

と言及する。このように、John Keats の生誕日は、(1)1795年10月29日か、あるいは (2)10月31日であるという2説である。

そして、Blunden はその著の終わりに、

He died on the night of 23 February 1821; . . .

と明言する。Lowell はその著に、臨終の Keats を看取った、友人 Joseph Severn (1793 - 1879) の、Charles Brown 宛の書簡の中の一節を紹介する。

He is gone. He died with the most perfect ease. He seemed to go to sleep. On the 23th, Friday, at half-past four, the approach of death came on. 'Severn—I—lift me up, for I am dying. I shall die easy. Don't be frightened! Thank God it has come.' I lifted him up in my arms and the phlegm seemed boiling in the throat. This increased until eleven at night, when he gradually sank into death, so quiet, that I still thought he slept.

これは、John Keats の、眠るような静かな臨終の様子である。後日、稿を改めて、「眠るような臨終 John Keats」と題して、上記の文献を元に再構築したいと思考している次第である。

なにはともあれ、両者とも、「1821年2月23日の深夜に亡くなった」という。John Keats は「1795年10月29日 (or 31日) に誕生した」というのであるから、逆算してみると、John Keats の寿命は、約25歳と10月となる。喩え Keats が遺伝による肺結核患者であったとしても、余りに早い夭

折である。これは、上記の諺の示す通り、まさに「才子短命」(The gifted die young.)であり、「神々に愛される人間は早死にする」(Whom the gods love die young.)である、と筆者は強調しておきたい。

(参考文献)

- Allott, Miriam ed. *The Poems of John Keats*. New York: Longman, 1986.
- Barnard, John ed. *John Keats: The Complete Poems*. Third Edition. Penguin Books, 1988.
- Blunden, Edmund. *John Keats. Supplement to British Book News*. London: The British Council, 1950.
- Craig, W. J. ed. *Shakespeare: Complete Works*. London: Oxford University Press, 1971.
- De Selincourt, E. ed. *The Poems of John Keats*. Fourth Edition. London: Methuen and Co. LTD., 1920.
- Deguchi Yasuo. trans. *The Complete Poetical Works of John Keats*. vol. 3. Tokyo: Hakuyousha, 1980.
- Drinkwater, John ed. *The Outline of Literature*. Second Volume. New York and London: The Knickerbocker Press, 1923.
- Houghton, Lord. (Richard Monckton Milnes) ed. *The Complete Poetical Works of John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1912.
- Ichikawa Sanki and Matsuura Kaichi. trans. *Hamlet*. Iwanami-bunko, 3830-3831. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1973.
- Inglis, Fred. *Keats. Literature in Perspective*. London: Evans Brothers Limited, 1966.
- Kawasaki Toshihiko. *An Introduction to English Literature History*. Tokyo: Kenkyusha, 2002.
- Lowell, Amy. *John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1929.
- Matsuura Tohru ed. *Keats' Sonnets*. Tokyo: Azuma-Shobo, 1966.
- Nakano Yoshio. trans. *The First Part of King Henry the Fourth*. Iwanami-bunko 32-204-4. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1979.
- Odazima Yuushi. trans. *King Lear*. Tokyo: Hakusuisha, 1989.
- Onizuka Mikihiko. *A Mechanism of English Grammar*. Tokyo: Pureisu, 2006.
- Sakuma Osamu. *200 words with many different meanings*. Chikuma-Shinsho. Tokyo: Chikuma-Shobo, 1999.
- Sawamura Torajiro ed. *Shakespeare: Hamlet Prince of Denmark*. Tokyo: Kenkyusha, 1984.
- Tomes, John. *Scotland. The Blue Guides*. London: Ernest Benn Limited, 1977.

※拙文の作成にあたって次の事典・辞書・聖書などを参考にした。それぞれ付記しなかったものもあるので、お断りしておきたい。

Abunai Hiroshi. *Switch into the English Mode*. Tokyo: Kenkyusha, 2004.

Fowler, H. W. *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. Oxford: The Clarendon

- Press, 1929.
- Hornby, A. S. et al. *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*. Tokyo: The Institute for Research in Language Teaching, 1965.
- Ikeda Yasaburo and Donald Keene. *Dictionary of Proverbs between Japan and England*. Tokyo: Asahi Evening News, 1982.
- Kihara Kenzou. *The New Century English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Sanseido, 1996.
- Koike Yoshio. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*. Fifth Edition, Tokyo: Kenkyusha, 1980.
- Konishi Tomoshichi. *Taishukan's Fresh Genius English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Taishukan, 1996.
- . *New Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Shogakukan Inc., 1973.
- Minton, T. D. *English Grammar in Action*. trans. Abunai Hiroshi, Tokyo: Kenkyusha, 2001.
- Nishio Minoru, Iwabuchi Etsutaro, and Mizutani Sizuo. *Iwanami's Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1971.
- Oki Fumihiko. *The Daigenkai*. Five vols, Tokyo: Fuzambo, 1933.
- Onizuka Mikihiko. *The Powerful English Grammar*. Tokyo: Kawadeshobo, 2005.
- Petersen, Mark. *Amazing Study of Real English*. Tokyo: Shueisha International, 2002.
- Saito Takeshi. *The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*. Third Edition, Tokyo: Kenkyusha Limited, 1985.
- Shibata Tetsushi. *The New Anchor English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Gakken, 1988.
- Simamura Morisuke, Doi Kouichi, and Tanaka Kikuo. *Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1976.
- Simura Izuru ed. *Koujien*. Third Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1983.
- Sinclair, John et al. *Cobuild's English Dictionary for Advanced Learners*. Third Edition, Harper Collins Publishers, 2001.
- Stuart A. Curtis. The Curtis=Watters' Illustrated *Golden Dictionary for Young Readers*. New York: Western Publishing Company, Inc., 1972.
- The Bible*. Tokyo: Nihon Seisho Kyoukai, 1956.
- The Holy Bible Containing the Old and New Testaments*. London: Collin' Clear-Type Press, n.d.
- The Oxford Dictionary of Quotations*. Third Edition, Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. London: North-Holland Publishing Company, 1974.
- Yamashita Keiichiro. trans. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1984.